

優秀賞

恩は売らない、忘れない

福岡県 八児中学校 一年
坊野 莉子

「小さな親切」とは何か考えてみる。

荷物を持ってあげる。ドアを開けてあげる。席をゆずってあげる。自分のできることで、困っている人を助けることを「小さな親切」と言うことは多いと思う。でも、「〇〇してあげる」という感情が恩を売っているように感じて、私はあまり好きになれない。

私の母は、よく知らない人にも声をかける。レジで並んでいて、前にカゴいっぱい荷物を持ち上げられないお年寄りがいると、「触りますよ。」と言ってカートにカゴを乗せてしまう。母ができなければ、私や兄に荷物をカートに乗せるように言う。「なんで？」と反抗期の私たちは母に言う。すると母は、「あんたの方が力があるんやけ、したっていいやん。」と答える。

「わあ、わざわざすみません。ありがとう。」

そうお年寄りが言ってくれると、母が「力を持て余してるんやけ、いいよね。」と私たちに言う。兄は、少し照れたように笑う。私もそうだ。でも、このやり取りで、私は「やってあげた」と感じることはない。少しだけ力が強い私たちがその力を貸すことで、誰かの役に立てるならそれだけのことだと母は言う。

ある日、そんな私たちにパンを買ってくれた方がいた。そんなとき母は、「わあ、よかったね。いただきなさい。」と迷わずに言う。そして、「ありがとうございました。」と私たちと一緒に頭を下げる。(私たちがしたことのお礼にもらったんだけど)と思わなくもない。そんな私の気持ちを察したかのように、

「よかったね。ほらみて、こんなこともあるんよ。嬉しいよね。こんなことを期待して何かを手伝うわけではないけれど、こんなふうに感じてくれる人もおるんよ。して損なことはないよね。」

と、とても嬉しそうに話してくれる。そんなやり取りを小さな頃から何度となく繰り返しているうちに、私の中で「〇〇してあげる」は「自分のできることをしただけ」の感情に少しずつ変わってきている。「店のドアを開けてあげる」は、「どうせ自分も出入りする」に変わった。

母は、「人のために何かした数秒、数分で達成されたことが大きく変わることはないんよ。気がついたら、それを無視して行った人と同じ時刻に同じ場所におるんやけ。」と言う。ただその数秒、数分が人の心を動かすのだ。

そんな母が、私たちに常々言うことがもう一つある。それは「してもらったことに感謝を忘れるな。そして感謝は必ず言葉と態度で表せ」ということだ。「私も〇〇してあげたんよ」と返すと、「でも〇〇してもらったよね」と返される。「してあげたことは忘れても、してもらったことは忘れてはいけん。」

「小さな親切」で救われたことは、私にもある。妹のベビーカーを押すのを手伝ってくれた人がいたから、私が母と手をつなげたこと。小さな私が自動ドアにはさまれないよう、開けてくれた人がいたこと。

そんな積み重ねが人の役に立つ。それを忘れずに生活していきたい。